慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朱書き文字に関する一考察 : キャクストン版『世界の鑑』(1481)を一例として
Sub Title	A study note on rubrication in Caxton's Myrrour of the Worlde (1481)
Author	徳永, 聡子(Tokunaga, Satoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.60 (2012. 3) ,p.83- 99
JaLC DOI	
Abstract	It is now widely accepted that there were many points of contact between manuscript and early print cultures; early printers, seeking to imbue their products with the authenticity of the previously dominant textual culture, attempted to make the products of the new technology appear as similar as possible to manuscripts in a number of respects. In studies of the history of the book in England, this continuity between manuscripts and prints has been recognised as an important issue. Nevertheless, some aspects still require detailed and extensive scrutiny, one of which is the rubrication of English fifteenth-century printed books. It was not until early 1484 that William Caxton, England's first printer, acquired types for printing initials. Without such apparatus, Caxton and his contemporary printers provided spaces with guide letters for initials, so that the rubricator could insert letters after printing; underlines, paragraph marks and initial strokes were also often added after printing, as in medieval manuscripts. Previous scholarship has touched on the possibility of research in this area, but there has not been any systematic research to examine rubrications of English fifteenth-century books, considering to what extent these manuscript additions were systematized (or unsystematized) in the transitional phase between handwriting and the mechanical production of texts. This paper has examined nine extant copies of the Myrrour of the Worlde, as a case study. It has argued that it is possible to discern distinctive patterns of rubrication among them, presenting possibilities and challenges of studying patterns or house styles of rubrications in Caxton's early books.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20120330-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

朱書き文字に関する一考察
――キャクストン版『世界の鑑』（1481）を一例として[1)]

徳　永　聡　子

ヨーロッパの活版印刷術は，15 世紀中葉にライン河流域のマインツで始まったとされる。最初はライン川に沿って，そして次第にイタリア，フランス，オランダ，フランドル，イングランドなど，ヨーロッパの各地へと普及していった。しばしば活版印刷術の誕生は「印刷革命」という言葉で形容されるが，それまで連綿と続いてきた写本文化が，一夜にして活版印刷文化と入れ替わったわけではない。むしろ最初期の印刷業者たちは，形態，素材，ページレイアウトなど，さまざまな要素を写本の伝統から引き継ぎ，印刷本に取り入れた。このような写本との相関性は，いわゆる「インキュナブラ（incunabula）」と称される 15 世紀に印刷された初期刊本の，特に最初期のものに見出される特徴とされている[2)]。たとえば，初期刊本に使われた活字の書体は，一般的に，同時代や少し前の手書き写本の書体をもとにデザインされている。また冒頭ページや，書（Book），章（Chapter）といった本文上の大きな区切りには，美しい彩りやデザインの装飾文字が，そして文章のはじまりには（装飾文字よりは小さめの）頭文字や区切りを示すパラフマーク（paraph mark）が，しばしば赤や青のインクを用いて手書きで挿入された。さらには金箔や豊かな色彩で，見事な欄外装飾が写本さながら施されることもあった。かの有名なグーテンベルク聖書の現存本に，そうした例を見出すことができよう[3)]。

写本文化と初期印刷本文化を断続した別個のものとして扱うのではなく，両文化に底流する継続性，それと同時に類似・相違性，発展性をとらえる視点は，特に 20 世紀以降重要視されるようになり，それにともない具体的な研究が重ねられてきた[4)]。しかしながら，研究の必要性や可能性は指摘されつつも，いまなおほとんど進展していない側面もある。そのひとつが本稿で扱う，初期刊本における手書き頭文字やパラフマークの研究である。

初期刊本では手書きの要素が含まれる場合，印刷後に書き入られるよう空白をあけて印刷された。特に巻や章といった本文の大きな区切りや冒頭ページには，人物や動物の姿が描き込まれた数行分の大きな頭文字（historiated initial）が華やかに，またページの余白には，動植物や蔦などの模様が縁飾りとして施された。こうした装飾を行った装飾画家や細密画家（illuminator, decorator, miniaturist）による仕事については，未開拓な部分もまだ多いとはいえ，美術史家によって着実に研究が積み上げられてきている。その成果により，特定の印刷本の装飾がどの地域や工房で仕事がなされたのか，また職人同士の交流，装飾の手法や使われている材料についてなど，少しずつ理解が深まってきている[5)]。

印刷本の装飾には，購入者の要望や予算といった，さまざまな要因が関わっている。このため，ある特定の作品の同じ版（作品，印刷業者，出版年など，書誌学的詳細がすべて同じ）であっても，施されている装飾の豪華さや様式，また装飾の有無自体は一冊ずつことなる。同様のことは，小さめの頭文字やパラフマークなどの要素についても同じである。本文上のより小さな区切りには，比較的装飾性の少ない頭文字やパラフマークが，おもに赤色のインクを用いて挿入された。それ以外にも，標題の朱書きのほか，本文の下線，章見出しと章番号を結ぶ線や，印刷された頭文字上の縦線や横線（initial strokes），欄外注釈なども手書きで施された[6)]。写本の時代から赤インクを用いられることが多かったため，ラテン語で「朱書き」を意味する言葉（*rubrico*）から由来する，‘rubrication’ という用語が，

こうした手書き要素全般を指すのに使われている。一方，担当した職人は朱書き師（rubricator）と称される。

本稿ではこの朱書き要素に注目し，写本文化から印刷本文化への移行期における，書物生産の様相に一考を加えたい。検討の対象として，ウィリアム・キャクストン（William Caxton）の最初期の印刷に焦点を当てる。まず，初期刊本における手書き文字研究の意義や問題点について一考する。そして分析の具体例として，1481 年に出版された『世界の鑑』（*The Myrrour of the Worlde*; *STC* 24762, *ISTC* im00883000）を取り上げ，この作品の現存本 9 点の調査から得られた，朱書き文字の分析結果を提示したい。

1476 年はじめ，キャクストンは大陸の地で習得した印刷術に加え，印刷機 1 台と活字一式，印刷用紙を携えイングランドに戻った[7)]。彼は帰国するとただちに，ウェストミンスター・アビーの一角を借りて，イングランド初の印刷所を設立した。1490 年頃にその生涯を閉じるまで，同地で 100 点以上にも及ぶ印刷物を世に送り出したとされている[8)]。キャクストンの出版業の最大の特徴は，英語の作品が中心だった点にある。贖宥状（しょくゆうじょう）や祈祷書などを除くと，大半はイングランドの作家の著作や，同時代に大陸で流行していた作品の英訳本だった[9)]。ウェストミンスターの印刷所設立後に，彼がまず手がけたのも英語の作品である。宮廷詩として流布していた小作品を数点印刷すると[10)]，今度は大作の印刷にも取り組み，チョーサーの『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*; *STC* 5082; *ISTC* ic00431000）を刊行した[11)]。その後は，チョーサーやリドゲイトらの小作品を出版する一方で，『イアソンの歴史』（*History of Jason*; *STC* 15383, *ISTC* il00112000）や『黄金伝説』（*The Golden Legend*; *STC* 24873, 24874, *ISTC* ij00148000）のように大部な作品も次々と出版していった。

キャクストンの初期出版物においても，本文の区切りを示す頭文字やパラフマークなどは印刷後に手で書き入れられた。キャクストンが木版の頭

文字を初めて採用したのは，1484 年 3 月に刊行した『イソップ寓話集』（*Historyes and Fables of Esope*; *STC* 175, *ISTC* ia00117500）においてである[12)]。パラフマークの印刷は，1483 年末以降に出版された『2 行連句』（*Disticha de moribus*; *STC* 4853, *ISTC* ic00313000）の一部分にはじめて見出される。それより前の出版物ではパラフマークも頭文字も，印刷時には入らなかった。彼の初期の印刷物では，頭文字が入る箇所に空白がとられ，どの文字が入るかを補助的に示すガイドレター（guide letter）がその空白に小さく印刷された。朱書き師はガイドレターを手がかりとして頭文字を入れた[13)]。またパラフマークや線，欄外注釈なども印刷後に加えられた。

A. S. G. Edwards が指摘しているように，同時代の大陸の印刷本と比べると，キャクストンのウェストミンスター本はきわめて装飾的要素が少なく[14)]，金箔や多彩色を用いた豪華な頭文字が施された例はほとんど皆無といっても過言ではない。しかし，より装飾性の低い簡素な手書き要素に注目し，キャクストン版の現存本を調査していると，じつはキャクストン本の印字面も多様性を帯びていることに気づかされる。多くの場合，赤インクが使われているが，時折，青色のインクが用いられていることもある。また同一の版でも，現存本によって頭文字やパラフマークのデザイン性がことなったり，手書きの要素がまったく追加されていない書物もある。大陸本の朱書き文字の研究を進めている Margaret Smith は，印刷後に朱書き文字が書き込まれたのは，現存本のおよそ半分弱ではないかと推定している[15)]。これは厳密な統計に基づくわけではないが，印刷後に必ずしも朱書きがなされたわけではないことを示唆している。

キャクストンの印刷本における朱書き文字の問題は，先行研究においても触れられてきた。もっとも早い段階では，19 世に活躍した著名な書誌学者 William Blades が，彼の著作『ウィリアム・キャクストンの生涯とタイポグラフィー』の第 2 巻（1863）で触れている[16)]。彼の代表作ともいえるこの研究書で，Blades はキャクストンが印刷したと考えられるす

べての書物をリストアップし，それぞれについて詳細な書誌学的解説を付けた。またキャクストンが用いた活字や紙，挿絵などの詳細な分析と解説も同書に加えている。特にキャクストン活字の分類表を，当時の最新技術であったリトグラフを用いて，G. I. F. Tupper の協力のもとに制作したことは画期的であった[17)]。同書のなかで Blades は，キャクストンの印刷物における手書き頭文字とパラフマークに触れ，キャクストンは朱書き師を雇用して，印刷後に頭文字やパラフマークを書き入れさせたと指摘している[18)]。また，キャクストンが 1484 年に出版した『塔の騎士の書』（*The Book of the Knight of the Tower*; *STC* 15296, *ISTC* il00072000）の現代校訂版の編者も，その序文において，大英図書館所蔵本には「キャクストンの標準的な朱書き文字」（‘Caxton’s standard rubrication’）のような頭文字やパラフマークが挿入さていると記述している[19)]。しかし，この編者は「標準的」ということが何を示すのかは具体的にしていない。実際のところ，キャクストンの印刷本に表れる朱書き文字を体系的に分類し，分析した研究はこれまでなされてない。つまり，「標準的」な朱書き文字とは何かを定義することさえ，現状では難しいのである。

一方で，キャクストン本における朱書き文字の研究の意義や可能性については，これまでにも指摘されたてきた。たとえば，キャクストンの印刷本に施された装飾的要素を調査した A. S. G. Edwards は，朱書き文字研究は ‘a large and potentially interesting question’ であると認めつつも，その研究対象からは外した[20)]。またおよそ 100 年もの歳月をかけて編纂され，大英図書館が所蔵するすべてのイギリス初期刊本の書誌記述を含む『大英図書館所蔵 15 世紀刊本目録』第 11 巻（通称 *BMC XI*）にも[21)]，この分野の研究の可能性が言及されている。編者の Lotte Hellinga は，ラヌルフ・ヒグデン（Ranulf Higden）が著し，ジョン・トレヴィザ（John Trevisa）が英訳した『ポリクロニコン』（*Polychronicon*; *STC* 13438, *ISTC* ih00267000）のキャクストン版の欄外注釈には，その筆跡から少なくとも 3 人が関わったことを示している[22)]。また Hellinga は，目録の書誌記

述に朱書き文字の有無を含めている。しかし，その記録方法に一貫性があるとは言い難く，頭文字やパラフマークの挿入の度合いや，スタイル上の違いなどの詳細については記述されていない。

このように，キャクストンの印刷本における朱書き文字に対して，研究者たちから一定の関心が寄せられていたにもかかわらず，彼の初期出版物全般について実際に現存本を調査し，朱書き文字の有無やパターンを体系的に整理して，それに分析を加えた研究はいまだ行われていない。前述のように，Blades や Hellinga は，朱書きを担当した職人が居た可能性を示唆したが，両者とも十分な証拠は提出していない。このため，朱書きは組織的にキャクストンの工房で行われたのか，あるいは印刷本の購入者が独自に手配したのかといった問いさえ，実際には未解決なのである。

キャクストンがはじめて木版頭文字を印刷に取り入れた『イソップ寓話集』の刊行（1484 年 3 月）までに出版した点数は，総計 60 点ほどで，贖宥状や広告などの一枚ものを除くと 50 点強である。そのうち祈祷書や時禱書などが 5 点，残りはチョーサーやリドゲイトの作品，年代記や宗教的な作品など，写本の時代から人気の高かった作品を含む。またキャクストン自身が英訳した大陸のロマンスや，彼の印刷業にとって重要な庇護者だったアンソニー・ウッドヴィルの翻訳作品などもあった。比較的短めの小作品は 4 折判（あるいは 8 折判）で，それ以外は 2 折判で印刷されている。これらの初期刊行物（一枚ものを除く）を朱書き文字の観点から検討してみると，ある傾向が浮かび上がってくる。4 折判で印刷された小冊子の多くは，ページ数が少なく，本文に頭文字やパラフマークの入る要素があまりない。たとえば，最初期のチョーサーやリドゲイトなどの 4 折判では，2 行以上の頭文字が用いられているのは，冒頭ページの最初の文字ぐらいである。しかも現時点までに調査した現存本には，ほとんどの場合手書き大文字が入っていない。一方，2 折版で印刷された書物には，頭文字の入る要素が多く見出される。本文も長く，区切れも増えることが関係しているのかもしれない[23)]。

しかし，ここで留意すべき大事な点がある。それは初期刊本の現存数の少なさである[24)]。初期印刷物には，1，2 点しか現存しない版が少なくない。このことは特に小型本や一枚物に当てはまる。実際，キャクストンの小冊子本も，ほとんどの版がごく僅かの現存数しか記録されていない。しかも，零葉や断片だけで現存する場合もある。それに比すると，2 折判は二桁代の現存数をもつ版が多いが，それでも同時代に実際に印刷された部数よりはるかに少ないであろう。またイギリスの初期刊本，とりわけキャクストン本は，19 世紀の愛書家が好んで蒐集し，その際にオリジナルの製本をバラして欠葉のある箇所に別のコピーから補ったりした。ゆえに，現在本がキャクストン工房で制作された時の，あるいは彼の同時代の読者が手にした書物の構造の原型をとどめているとは限らない。また 19 世紀の蒐集家は，しばしば余白の書き込みなどを消して，できるだけ「きれいな」印字面を取戻そうと努めた。この際に使われた化学薬品の影響で，頭文字のインク（特に青色）が消失してしまったこともある。これは現存本をよく観察しないと見落とし易い点であり，充分な注意が必要である。

キャクストン版の朱書き要素について検討するためには，上記のような問題点を考慮することが必須である。その上で，できるだけ多くの版の現存本を可能な限り網羅的，徹底的に調査ししていくのが肝要であろう。本稿執筆時では，まだ調査の途中段階にあるため，キャクストンの初期印刷物に関する包括的な分析結果を示すには至っていない。このため，ここでは上述の問題点を踏まえた上で，『世界の鑑』という作品を一例として，朱書き文字の調査からどのようなことが見えてくるのか，分析の結果と，今後の研究の可能性を示したい。

キャクストンが 1481 年夏に出版した『世界の鑑』は，中世最大の百科全書を編纂したヴァンサン・ド・ボーヴェ（Vincent de Beauvais）の作と考えられたこともあったが，現在ではメッツのゴスワン（Gossuin de Metz）が著した中世宇宙論とする向きがある[25)]。その序文でキャクストンは，商人仲間の要望を受け，彼自身がフランス語から英訳したと述べて

いる[26)]。第 1 部では神の力や自由七科が讃えられ，第 2 部は地球の地理や各地域の生物，大気や気候の仕組みなどについて描写し，第 3 部は古代の作家にも言及しながら，宇宙や科学論を展開させている。キャクストン自身が序文で，この作品の中世写本の伝統にならい挿絵を施したと述べているように，地理や宇宙の体系を描いた木版挿絵がふんだんに取り入れられている。この出版物は，キャクストンがはじめて木版挿絵を取り入れた印刷本でもある。キャクストンが参照した可能性の高い写本については議論が重ねられてきた。大英図書館が所蔵する Royal MS 19 A. IX とフランス国立図書館所蔵の MS fr. 574 が，その候補として挙げられている。キャクストン版と 2 つの写本の関係は複雑であるが，本文，挿絵，ならびに挿絵に付された見出しの文言等との比較から，最新の研究ではキャクストンが両方の写本ときわめて関係性の近い，別の写本を底本として使ったという見解が示されている[27)]。

世界中に散在するインキュナブラの所在を記録する *Incunabula Short Title Catalogue* によると[28)]，キャクストン版『世界の鑑』（1481 年）の現存本は，現時点までに総計 19 点（と零葉 1 枚）が報告されている。これらはイギリス，ドイツ，アメリカの図書館で所蔵されている。筆者は本稿執筆時までに，この内 9 点を調査した。それぞれの書物の所蔵館名，請求記号（以下での略称），欠葉や補遺の有無を下に示す。

1. ウィリアム・H・シャイデ図書館 S2.13 (Scheide); wanting a1
2. ジョン・ライランズ図書館 3469 (JRL^{1}); wanting a1
3. ジョン・ライランズ図書館 R4744 (JRL^{2}); wanting a1
4. 大英図書館 IB. 55040 (BL^{1})[29)]
5. 大英図書館 C.10.b.5. (IB. 55041) (BL^{2}); wanting a1[30)]
6. テキサス大学，ハリー・ランサム・センター PFOR 1025 PFZ (HRC); wanting leaves a8, c4–6, d3 and 6, f8
7. ピアポント・モーガン図書館 PML 776, ChL 1770 (PML)

8. ケンブリッジ大学図書館 Inc.2.J.1.1 [3494] (CUL); wanting leaves a1–3, a8 and most of b1 (a8 and b1 supplied in ms)[31)]
9. ボードリアン図書館 S.Seld.d.5 (Bodleian); wanting a1, leaf n4 backed[32)]

これまでに調査した書物 9 点は，同時代の製本を留めるものはなく，いずれも後世の製本であった。上記したように，書物によっては最初の白紙ページを欠いたり，複数のページが欠葉していたり，部分的にペン・ファクシミリで本文が補われたりしている。しかし，化学的な洗浄などによる損害は受けていない。

キャクストン版『世界の鑑』（1481 年）には，大きく分けて 2 種類の手書きの要素がある。ひとつは先に触れた，挿絵に付された見出しである。たとえば，地図や天体を示す図には，地域名（Africa, Asia, Europe）や天体の位置関係などを示す見出しが，印刷後に（茶色みを帯びた）黒インクで書き込まれている。筆者が調べた 9 冊すべてにおいて，挿絵の見出しは同じ筆跡で書き込まれていた。Hellinga も指摘するように，この見出しはキャクストンの工房内で，印刷後に専門の写字生が書き入れたのであろう[33)]。

手書き要素のもうひとつは，本稿の主題の朱書き文字である。上記 9 点について，印刷後に専門の職人によって手書で施された頭文字，パラフマーク，線の有無，パターンについて調査を行った。その結果，朱書きを欠いたのは BL[1] だけであった。この書物には頭文字，パラフマーク，線のいずれも，まったく書き込まれていない。一方，このコピーには挿絵の見出しはすべて書き入れられている。ここからキャクストンの工房内の生産過程として，印刷終了後に，最初に挿絵の見出しが書き入れられ，その後に朱書き文字が施された可能性が考えられる[34)]。

残りの 8 点を仔細に調べていくと，一冊の印刷本のなかでも，同一文字が微妙にことなる複数のパターンを有すこともあり，頭文字のスタイル

上の分類は必ずしも容易ではなかった。しかし，朱書きの複数の要素を考える合わせと，8 点とも一冊のなかでは同じスタイルが一貫しているように思われる。

さらにコピー同士を比較して，同じ特徴を有するもののグループ化を試みた。その結果をまとめたものが次の表である。

表：キャクストン版『世界の鑑』（1481 年）の朱書き文字の比較

	頭文字のパターン	パラフマークのパターン	パラフマークの有無（章見出し前）	パラフマークの有無（章番号前）	章見出しの線
1. Scheide	A	a	○	○	——
2. JRL[1]	A	a	○	○	——
3. JRL[2]	A	a	○	○	——
4. BL[1]	——	——	——	——	——
5. BL[2]	B	b	——	○	——
6. HRC	B	b	——（各部の見出しのみ）	——（各部の見出しのみ）	○
7. PML	C (or B)?	c (or b)?	○	○	——
8. CUL	C (or D)?	——	——	——	（1 箇所のみ）
9. Bodleian	E	——	——	——	——

まず，最初の 3 点（Scheide, JRL[1], JRL[2]）には，同じ特徴をもった頭文字とパラフマークが見出された。また各部や章の冒頭の見出しと番号に，パラフマークが施されている点も共通している。次に BL[2] と HRC も，同じタイプの頭文字とパラフマークが書き込まれていた。この 2 冊は，頭文字の横線に「ため」があり，パラフマークが楕円を切ったような形状であるのが特徴である。ただし，BL[2] の章見出しの番号にはパラフマークが付されているのに対し，HRC 本は「章」ではなく「部」の冒頭の見出しだけに入るという相違がある。特徴的なのは，表の一番下に挙げた Bodleian 本である。同書には頭文字のみが入り，そのスタイルも丸みを

帯びた太めの線で，他の 7 つのコピーの朱書き文字とは際立ってことなる。最後に PML と CUL 本はきわめて分類が難しいことを指摘しておく。BL^2 と HRC の頭文字とパラフマークに類似しているようにも思われるが，先に触れた文字の横線の「ため」が見られない。また文字の種類によっては，PML と CUL 間にも若干ながら差異がみとめられる。

今回の分析は，現物調査とデジタル画像の検討に基づく。調査開始段階で予期していたよりも，PML と CUL 本の例が示すように，微妙な差異の判断に悩むところが多かった。再確認をしつつ，残りの現存本の調査を進めることで，この分類の精度をあげていきたい。一方で，ここに示した現存本 9 点の分析から，同じ版でも書物ごとに朱書き文字のスタイルや度合いがことなること，また同じ特徴が複数のコピーに共通して見出されることが示された。キャクストンの他の書物（『世界の鑑』のその他の現存本のみならず，他の版も含めて）に，同様のパターンが見出されれば，キャクストン工房内で朱書きが組織的に行われていた可能性が高まる。実際，今回分析した書物に施された同じスタイルの朱書き文字が，他の年にキャクストン工房から出版された印刷本にあることを，すでに確認している。

印刷本の手書きの要素は，どのような生産過程において追加されていったのか，そうした要素が追加された書物は，現存本のなかでどれほどの割合を占めるのだろうか。また朱書き文字は，読書においても重要な視覚的機能もそなえている。本稿の分析が示したように，頭文字やパラフマークといった要素は，すべての書物において一様なわけでは決してない。また朱書き師が誤った頭文字を挿入することもあり，読者を誤った読みへと導くこともある。つまり，印刷後に施された（あるいはされなかった）朱書き文字によって，同じ版でも一冊ずつことなる書物へと変容した。これは本文の読みにどのような影響を与え得るのだろうか。今後さらにキャクストンの初期刊本における朱書き文字を書誌学的に調査し，体系的な整理を進めることで，こうした問いについて考察を深めていきたい。

注

1） 本研究の遂行中お世話になった各図書館関係者，ならびに加藤誉子博士に，ここに記して謝意を表したい。

2） 一般にインキュナブラとは，活版印刷術が発明された 1450 年代から 15 世紀末までに，金属活字を用いて印刷された西洋初期刊本を指す。

3） たとえば大英図書館のウェブサイトで，同館所蔵本のデジタルファクシミリを閲覧することができる。British Library, ‘Treasures in Full: Gutenberg Bible’ <http://www.bl.uk/treasures/gutenberg/homepage.html>（最終閲覧日：2011 年 12 月 10 日）。

4） 初期刊本の特徴を表す際に，しばしば写本を「模倣」したと強調されることがある。しかし，インキュナブラの諸要素は，写本の「模倣」という言葉だけでは説明しきれない複雑な問題を内包する，という指摘もなされている。この点については次の論文を参照のこと。Margaret Smith, ‘The Design Relationship between the Manuscript and the Incunable’, in *A Millennium of the Book: Production, Design and Illustration in Manuscript and Print 900−1900*, ed. by Robin Myers and Michael Harris (Winchester and New Castle: St Paul’s Bibliographies and Oak Knoll, 1994), pp. 23–43.

5） Eberhard König，Lilian Armstrong といった研究者の一連の著作・論文が代表的である。また，ごく最近の研究の例を挙げるならば，次の論文集の ‘Painted Decoration’ のセクションに掲載されている，Mayumi Ikeda，Lilian Armstrong，Chrstine Beier 各氏の論考に注目されたい；*Early Printed Books as Material Objects: Proceedings of the Conference Organized by the IFLA Rare Books and Manuscripts Section, Munich, 19−21 August 2009*, ed. by Bettina Wagner and Marcia Reed, IFLA Publications 149 (Berlin/New York: De Gruyter Saur, 2010).

6） Margaret Smith によると，‘initial strokes’ という用語は，インキュナブラ目録の基準となる『大英図書館所蔵初期刊本目録』（通称 *BMC*）で採用されている；Margaret Smith, ‘Patters of Incomplete Rubrication in Incunables and What they Suggest about Working Methods’, in *Medieval Book Production: Assessing the Evidence*, ed. by L. L. Brownrigg (Los Altos Hills: Anderson-Lovelace, 1900), pp. 133–46 (p. 133).

7） キャクストンがイングランドから大陸に渡った時期の詳細は分かっていない。最初にブルージュに定住した後，途中，政治的混乱の煽りを受けてケルンに逃亡し，そこで印刷術を学んだとされている。キャクストンの生涯と彼の出版物にかんする最新の研究は，Lotte Hellinga, *William Caxton and Early Printing in England* (London: British Library, 2010) を参照され

たい。

8） キャクストン出版物の書誌情報については，次の文献が特に有益である。Paul Needham, *The Printer & the Pardoner: An Unrecorded Indulgence Printed by William Caxton for the Hospital of St. Mary Rounceval, Charing Cross* (Washington, DC, 1986), Appendix D; *Printing in England in the Fifteenth Century: E. Gordon Duff's Bibliography with Supplementary Descriptions, Chronologies and a Census of Copies*, ed. by Lotte Hellinga (London: Bibliographical Society, 2009).

9） Lotte Hellinga, *Caxton in Focus: The Beginning of Printing in England* (London: British Library, 1982).

10）ジョン・ラッセル（John Russell）が数年前に行ったラテン語式辞（*Propositio*; *STC* 21458, *ISTC* ir00365300），チョーサー（Geoffrey Chaucer）の次世代詩人として，15 世紀のイングランドで人気を博したリドゲイト（John Lydgate）の短詩作品 3 点（『馬と羊とガチョウ』（*The Horse, the Sheep and the Goose*; *STC* 17019, *ISTC* il00407000）『田舎者と小鳥』（*The Churl and the Bird*; *STC* 17009, *ISTC* il00406000），『食卓のそばに立つ少年』（*Stans puer ad mensam*; *STC* 17030, *ISTC* il00411000），ベネディクト・バラ英訳の『2 行連句』（*Disticha de moribus*; *STC* 4851, *ISTC* ic00314000）である。

11）大英図書館所蔵のキャクストンの初版と第 2 版は，同館のホームページ上でデジタル・ファクシミリを閲覧できる；British Library, 'Treasures in Full: Caxton's Chaucer' <http://www.bl.uk/treasures/caxton/homepage.html>（最終閲覧日：2011 年 12 月 15 日）。

12）*Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Library, Part XI: England*, ed. by Lotte Hellinga ('t Goy-Houten: Hes and De Graaf, 2007), pp. 346, 361；以下，*BMC XI* と記す。

13）ただし，ガイドレターのない場合もあり（おそらく印刷上の手違いと思われる），それにより朱書き師のミスが誘発されることもあった。

14）A. S. G. Edwards, 'Decorated Caxtons', in *Incunabula: Studies in Fifteenth-Century Printed Books Presented to Lotte Hellinga*, ed. by Martin Davies (London: British Library, 1999), pp. 493–506.

15）Smith, 'The Design Relationship', p. 189.

16）William Blades, *The Life and Typography of William Caxton, England's First Printer: With Evidence of his Typographical Connection with Colard Mansion, the Printer at Bruges*, 2 vols (London: J. Lilly, 1861–63).

17）この仕事における Blades と Tupper の関係については，次の論考が有益で

ある；Robin Myres, ‘William Blades’s Debt to Henry Bradshaw and G. I. F. Tupper in his Caxton Studies: A Further Look at Unpublished Documents’, *Library*, 5th ser. 33 (1978), 266–83.

18）‘[Caxton] certainly employed, so late as 1485, the services of a Scrivner, or rubrisher, to insert the initial letters at the beginning of chapters, and to make paragraph marks in appropriate places’; Blades, *Life and Typography of William*, II, liiii.

19）Geoffroy de La Tour-Landry, *The Book of the Knight of the Tower*, ed. by M. Y. Offord, EETS SS 2 (London: Oxford University Press, 1971), p. ixv.

20）Edwards, ‘Decorated Caxtons’.

21）註 12 の書誌を参照のこと。

22）*BMC XI*, p. 346.

23）ただし，実際に頭文字が施されているかどうかは，別の問題である。

24）15 世紀刊本の現存数から実際の版数を推定するというのは，初期刊本研究において長年論じられてきた大問題のひとつであるが，これについて，最新の論文が新たな見解を示している。Jonathan Green, Frank McIntyre, and Paul Needham, ‘The Shape of Incunable Survival and Statistical Estimation of Lost Editions’, *Papers of the Bibliographical Society of America*, 105.2 (2011), 141–75.

25）複製版として，*The Mirrour of the World: Westminster, 1481*, English Experience 960 (Norwood, N.J.: W. J. Johnson; Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1979)，校訂版として *Caxton’s Mirrour of the World*, ed. by Oliver H. Prior, EETS ES 110 (London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1913) などがある。

26）この作品のキャクストンの序文は，N. F. Blake, ‘The “Mirror of the World” and MS Royal 19 A ix’, *Notes and Queries*, 212 (1967), 86–87; *ibid*., *Caxton’s Own Prose* (London: Andre Deutsch, 1973), pp. 114–16; *Caxton’s Mirrour of the World*, pp. 5–6 などを参照のこと。

27）*BMC XI*, pp. 122.

28）*Incunabula Short Title Catalogue*, ed. by British Library <http://www.bl.uk/catalogues/istc/index.html>（最終閲覧日：2012 年 12 月 17 日）。

29）*BMC XI*, pp. 122–23.

30）*BMC XI*, pp. 123.

31）*Catalogue of the Fifteenth Century Printed Books in the University Library, Cambridge*, ed. by J. C. T. Oates (Cambridge: Cambridge University Press, 1954), 4074.

32）*A Catalogue of Books Printed in the Fifteenth Century now in the Bodleian Library, Oxford*, ed. by Alan Coates, Kristian Jensen, Cristina Dondi, Bettina Wagner, and Helen Dixon, with the assistance of Carolinne White and Elizabeth Mathew; blockbooks, woodcuts and metalcut single sheets by Nigel F. Palmer; an inventory of Hebrew incunabula by Silke Schaeper, 6 volumes (Oxford: Oxford University Press, 2005), IV, 1433 (I–002).

33）*BMC XI*, p. 122.

34）ただし，*BMC XI*（p. 122）によると，筆者が未調査の現存本のうち2点（James Ford Bell Library, University of Minnesota と Yale Center for British Art 所蔵本）の目録には，見出しの書き入れらがないと記されている。これらのコピーに朱書きがなされていたら，この推察は成り立たない。

Synopsis

A Study Note on Rubrication in Caxton's *Myrrour of the Worlde* (1481)

Satoko Tokunaga

It is now widely accepted that there were many points of contact between manuscript and early print cultures; early printers, seeking to imbue their products with the authenticity of the previously dominant textual culture, attempted to make the products of the new technology appear as similar as possible to manuscripts in a number of respects. In studies of the history of the book in England, this continuity between manuscripts and prints has been recognised as an important issue. Nevertheless, some aspects still require detailed and extensive scrutiny, one of which is the rubrication of English fifteenth-century printed books. It was not until early 1484 that William Caxton, England's first printer, acquired types for printing initials. Without such apparatus, Caxton and his contemporary printers provided spaces with guide letters for initials, so that the rubricator could insert letters after printing; underlines, paragraph marks and initial strokes were also often added after printing, as in medieval manuscripts. Previous scholarship has touched on the possibility of research in this area, but there has not been any systematic research to examine rubrications of English fifteenth-century books, considering to what extent these manuscript additions were systematized (or unsystematized) in the transitional phase be-

tween handwriting and the mechanical production of texts. This paper has examined nine extant copies of the *Myrrour of the Worlde*, as a case study. It has argued that it is possible to discern distinctive patterns of rubrication among them, presenting possibilities and challenges of studying patterns or house styles of rubrications in Caxton's early books.